

25.6.5 6月日本子ども宣教局伝道学校：6月学院福音化

「聖霊の導き」

6月学院福音化の大きなタイトルを「聖霊の導き」としました。

聖書は神様のみことばです。その聖書は何を語っているのでしょうか。ただイエス・キリストを語っています。旧約は来られるメシア、新約は来られたキリスト。

ヨハネ 5章 39節に、「その聖書は、わたし（イエス・キリスト）について証ししているものです」と言われています。

ヨハ 5:39

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。

そのイエス・キリストを私たちは福音だとも言います。ローマ 1章 2節から 4節、最初の部分と終わり部分を見れば、福音は主イエス・キリストだと語っています。

ロマ 1:2~4

——この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる靈によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。

福音はイエス・キリストだということです。では、なぜイエス・キリストを福音と言うのでしょうか。
十字架を通して、過去、現在、未来のすべての問題を終わらせてくださったからです。救われた神の子どもは、信仰によって、その事実を信じて告白することになりました。ところで、その信仰さえも神様の恵みのプレゼント（賜物）として私たちに与えられたのです。この地に生きているすべての神様の民は、永遠の神の国に向かって流れているところです。永遠の神の国に流れて行っている恵みの川の上に聖霊という船に乗って行きます。私がその船の中でいっしょけんめいに漕ぐ必要はありません。そのまま流れて行くようになっています。宇宙の惑星に飛んでいく銀河鉄道999ではなく、天国行きの救いの列車に乗っているのです。その船や、その列車の中では私がすることができるは、単にからだを任せただけなのです。また、神様がなさることを見れば良いのです。

今月の学院福音化も先月に引き続き使徒の働きのみことばです。ですから、先月のみことばを少しもう一度見ましょう。カルバリの丘、オリーブ山、マルコの屋上の部屋の道しるべでした。

カルバリの丘の道しるべは何だったでしょうか。イエス様が行かれた十字架の道、その道しるべでした。

オリーブ山の道しるべは、十字架を通して完成して開いてくださった神の國の道しるべです。その神の國ということは、統治です。それゆえ、私たちは従順にするのです。イエス様が従順にされて十字架にかかるように。そのように、イエス様が生きられた生き方を通して現れた、この道しるべに従って、私たちも同じように生きるようになっています。ところで、その道は決して簡単ではないのです。それゆえ、マルコの屋上の部屋の道しるべという、聖靈が導いて行ってくださるという約束をくださったのです。

この三つのことを心にとめてから、6月の学院福音化のみことばを見ましょう。

そのように聖靈の導きに引っ張られて生きて行った者の証拠が記録されたのが、使徒の働きです。彼らの生き方は、イエス様が自分を否定し十字架を負う生き方だったです。使徒の働き（使徒行伝）を、よく他の言葉で「聖靈の働き（聖靈行伝）」だとも言います。聖靈が行われた行跡を記録したということです。

1課から5課までを説明しますが、1課だけ少し集中して見て、あとは簡単に見ます。

1課 アジアの道しるべ（使13:1-4）

使徒の働き 13章1~4節

- 01さて、アンティオキアには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネルキオ、領主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどの預言者や教師がいた。
- 02彼らが主を礼拝し、断食していると、聖靈が「さあ、わたしのためにバルナバとサウロを聖別して、わたしが召した働きに就かせなさい」と言われた。
- 03そこで彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いてから送り出した。
- 04二人は聖靈によって送り出され、セレウキアに下り、そこからキプロスに向けて船出し、

2節と3節に、たしかに、聖靈が彼らを導いて、聖靈によって送り出された、このように言われています。聖靈がされたのです。聖靈の導きというのは、私の思い（願い）を成し遂げるために助けてくださるときまで、ねだることではなく、聖靈が導いてくださるときまで待つことです。ご飯を食べずに、どうにかしてくださいと言つてねだるのではなく、聖靈の導きを待つのです。そのときにはじめて聖靈が働き、導いていってくださいます。そのようにして聖靈の導きにしたがつて行くときに、神様が備えられた人にも会うようになって、神様が備えられたことも起こるようになります。良いことでも、苦難であっても、それが神様の導きであることを知るようになります。神様が備えられた場所に引っ張られて行くようになっているのです。私が先に人を見て、場所を見て、なにかを見て判断するのではないということです。私がサミットタイムを一生懸命にして、300%専門性を備えて、祈りで準備ができたときにはじめて、「よし！よくやつた」と聖靈がそのときに導かれて行くではありません。約束された聖靈が私の中に来られれば、サミットタイムもすることができるようになり、300%でも1000%でも専門性も備えるようになっていて、祈りもできる状態に作ってくださるようになるのです。どちらがさらにはやくて正確でしょうか。私がすべて準備

を完ぺきにしてから聖靈に導かれるのと（そのようにできるかも分かりませんが）、聖靈が導いて行ってくださる中で、一つ一つなされて行くこと。
「聖靈が言われた」「二人は聖靈によって送り出され」

2課 マケドニアの道しるべ（使16:6-10）

使徒の働き 16章6～10節

06 それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖靈によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。

07 こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御靈がそれを許されなかつた。

08 それでミシアを通り、トロアスに下った。

09 その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。

10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。

6節と7節見ると、聖靈が禁じられた、許されなかつたのです。聖靈が禁じられて、許されなかつたら、だれがそこに突き進むことができるでしょうか。その道をふさいで新しい道を開かれるなら、だれがそれを拒否することができるでしょうか。そのようにして、聖靈の導きにしたがつて行ったので、また、神様が備えられた場所と人とことがなされるのです。マケドニア地方の主要な町で植民都市のピリピに行きました。そこに行ったら、神様が備えられたリディアとの出会いがあり、リディアの家がまた、教会として用いられます。そのあと、悪靈につかれた女を癒やす事件によって、投獄されるようになったのですが、看守とその家族が救われるようになったのです。それがすべて聖靈の導きによってなされたことです。

3課 ローマの道しるべ（使19:21）

使徒の働き 19章21節

これらのことがあった後、パウロは御靈に示され、マケドニアとアカイアを通してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならない」と言った。

「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」とパウロが話しましたが、実は韓国語聖書を見れば、「御靈に示され」という言葉が抜けています。「このことの後にパウロがマグドニアとアカイアを経てエルサレムに行くことを決意した」となっています。そしてその後に、「ローマも見る」となっています。重要な単語を抜いたのです。その告白をされた方は、聖靈です。パウロがこのような信仰の告白をしたので、神様が感動してパウロの言葉を引用したというのは、誤った解釈です。すでに神様の計画の中にあったことを

聖霊の導きによって告白するようになったということです。それゆえ、19章21節、23章11節にもあります。

使徒の働き 19章21節

これらのことがあった後、パウロは御靈に示され、マケドニアとアカイアを通ってエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならない」と言った。

使徒の働き 23章11節

その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証ししたように、ローマでも証しをしなければならない」と言われた。

人がしたことか、神様がなさったことなのか、これをよく区分してください。

4課 恐れることはできません、パウロよ（使27:24）

前の3課に続く内容でしょう。24節だけ見れば、明らかではないのですが、23節に確かに記録しています。

使徒の働き 27章23～24節

23 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、

24 こう言ったのです。『恐れることはできません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』

神の御使いが私のそばに立って「あなたは必ずカエサルの前に立ちます」

皆さんすべてがカエサルの前に立った者です。アメリカのトランプ大統領の前に立つということではなく、どこかの国家元首、大統領、王たちの前に立つという話ではありません。なぜ皆さんのがエサルの前に立つた者なのでしょうか。世の中のすべての人々は、自分が王のように生きているでしょう。神のように自ら王になって生きています。今日一日を生きてきて、皆さんの周囲にいるすべての未信者がみなカエサルなのです。自分しか分からない王です。皆さん、恐れることなく、皆さんに与えられた、そのすべての出会いの中で、神の子どもの大胆さを現してください。

5課 ローマ福音化の弟子たち（ロマ 16:25-27）

ローマ人への手紙16章に出て来る人物のニックネームが出て来るので、7つのニックネームは聖霊の導きと働きによって、それぞれに与えられた役割をしたということです。彼らがはじめからこのようになるべきだ、あのようになるべきだ、そのようにしたのではありません。神様がどのように用いられるのかは

分かりません。私たちが祈るべきなのは、「私は家主として」「私は同胞として」また、何か、そのように祈るのではありません。神様が私をどのような者として用いられるのかを祈なければならないのです。

エペソ4章にその部分をよく記してあります。頭であるキリストのからだを建て上げるために、私たちをからだの各部分として、役割を生きていくだけなのです。エペソ4:1でパウロは、このように話します。「さて、主にある囚人の私はあなたがたに勧めます。あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」7節には「しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられます。ある者には1つのタラント、ある者には2つのタラント、ある者には5つのタラントを与えられます。12節で結論を語っています。「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」神様の完璧な召し、それに従順にすれば良いのです。

結論です。

神様はすでに完璧なシナリオを組んでおられます。必要なすべてのセットを作つておかれ、必要なエキストラもみな準備しておかれました。神様の作品の主人公は、ただイエス・キリストだけです。私たちはセットの一部分として用いられるのか、通り過ぎるエキストラとして用いられるのかは分かりません。ただ私たちの生活はイエス・キリストがあらわれる、さらに、あらわれるようになることに用いられるだけなのです。

旧約の預言書を見れば、神様のみことばが○○に臨んだ、このようなことばがたくさん出てきます。みことばを受けたその預言者が主人公でなく、そこに臨んだ神様のみことばが主人公です。神様が、どんなみことばを伝えさせて、そのみことばがどのように成就されたかを見なければならぬのです。ところで、私たちは聖書を読んだり、みことばを聞いたりする時に、そのままそのストーリーにだけとても集中してしまいます。

たとえば、出エジプト記を見ると、映画にも出て子どもたちのアニメーションでもたくさんありますが、見ると、神様のみことばが何かに集中していなくて、一場面一場面、そのストーリーにとても集中しています。たとえば、モーセをナイル川に置くときの場面とか、聖書にはたくさん書かれていません。しかし、そこに、とても多くの私たちの人間的な人間味あふれるストーリーを入れるのです。10のわざわいも同じです。聖書を見てみると、その10のわざわいについて説明しているのは、数節しかありません。ところで、それを映画やアニメーションで作っているでしょう。とてもスペクタクルに、感動するように作り出します。紅海が分かれることも同じで、聖書には1節に書いてあるだけです。「モーセが手を海に向けて伸ばすと、主は一晩中、強い東風で海を押し戻し、海を乾いた地とされた。水は分かれた。」(出14:21) ところで、それをもうみな中間に説明をして映画で作り出すのです。風が吹くことから始めて。だんだん壁になる場面とか、アニメーションで思い出すのは、その壁になった水にサメが来たり、とにかくこのように周辺のこと、ストーリーにだけとても集中してしまうのが私たちだということです。本来、出エジプトを通して神様が語ろうとされるメッセージは何でしょうか。不可能な人間に絶対可能な神様が働くということでしょう。羊の血を通して救いを成し遂げるということでしょう。使徒の働きも、数多くの使徒の行跡が

記録されていますが、そこで重要なことは、彼らが何をしたのかが重要なのではありません。偉大な
伝道者パウロがどのようにした、それが重要なだけでなく、パウロが聖霊の導きをどのように受けたのか、
また使徒の働きは続くというでしょう。29章以降に、私たちに与えられました。今も続けて書かれています。
それは、人の働きが書かれているのではありません。聖霊が働きかけられた、聖霊が導かれた、その働き
が記されているのです。

今月もその聖霊の導きの中で、その流れの中にからだを任せて、従順にして生きる1か月になるように
祝福します。